348・742

淋病食養根治秘法

東京大日書房版

始

特231
584

食養健全若返法大家
井上正賀 著

淋病食養根治秘法

昭和八年四月廿四日撮影
美容健全若返法大家
井上正賀氏肖像（六十四歳）

筆者淋病食養療法を研究体驗すること、實に數十年、今や、世の要求に應じ、その法を公開するの必要を感じ、本書を刊行することゝなつた。讀者必ずや、本書を信頼して可なりである。

昭和八年六月三日

著　者　識

簡易体驗 淋病食養根治秘法

食養美容若返法專攻　井上正賀　述

一

性の亨樂の裏面に、惡魔の如く控ゆるものゝ一つに、淋病がある。苟も、現代の青年は、一度は、その關門をくゞるを常とするなどゝ勝手なことを云ふものがあるが、それは、とに角として、淋病が、多くの男女を人知れず惱まして居ることは、事實である。然かも、その惱みたるや、存外、深刻で、時としては眞に骨を削るが如き苦痛を感ずることさえある樣である、而して、淋病は、その性、極めて、頑强で、現代に知られて居る如何なる、幾多の療法に依るも、

容易に、根治しないので、この病の爲めに、困つて居る人は、容易に、計り知る可からざる程に多くある。されば、かゝる弱点（？）につけこんでか、世に幾多の淋病に關する藥劑（内服藥若くは外用共）や療法が、現はれて居り、現に、日々の新聞紙上にも、一日、幾百圓かの費用を使つたそれに關する廣告を澤山に見る位である。

二

思ふに、淋病は、陰部の病であるのと、然かも、それに、苦痛が伴ひ、容易に根治せず、且つ、その禍たるや、單に、自身ばかりでなく、相手方にも感染し、加ふるに、時としては、それが、出生兒の健康に影響するなど、その關係する範圍も、また、廣きなどの種々なる理由からして、一旦、淋疾に罹つたものは、たとえ、財産を蕩盡するとも、捨て置くことの出來ないと云ふ様なことが手傳つて、世に淋病根治法を研究するもの、若くは、別段、其藥について確信が無くとも、單に、賣らんの意味で、かく、數え盡すことの出來ない程の多くの淋病藥や、療法が世に現はれて居るのであらう、筆者は多年に亘つて、右から出來て居る種々なる淋病藥、療法若くは、最新の學理を應用したと稱せらるゝ色々な淋病新藥若くは、淋病療法なるものについて、研究し、且つ、体驗した、されば、かゝる藥劑や、療法に對して、その眞の効果について、相當の意見や、批評す可き思慮をも有して居る。然かも、他人樣の爲さることには何等の批判も加える意思はないし、干渉的な言辭を弄することも好まないから何等、それ等については言及しない。

三

然かし、筆者の淋病に關して多年に亘る研究と体驗からして、知り得る範圍に於いては、淋病は、主として、食養療法と、それに連關した方法に依り、極めて容易に、且つ、簡易に治療し得るものなることの確信と事實とを有するに到つたので、これを淋病治療上の最良方法と考え本書に述べて、世の淋病に惱む人々の參考に供し、聊か、世人の健康增進に寄與するところあらんと欲する以外に他意がないのであることを特に述べて置きたい。と云ふのは、筆者は、大分古い話であるが、今から、約四十年前、明治廿八年東京帝大農科大學農藝化學科を食養專攻にて卒業して以來、現在に到る迄、數十年間、專心、食養健康、治病、若返法を研究し、その結果、殆んど、すべての病氣は、たとえ精神病と

ても、日々の適當なる食養方法に依つて治癒され得るものなることの確信を得るに到つたので、淋病の治療も、やはり、この方法に依ることが、最も、簡單で確實であることを見出したからである。而して、實を云ふと、筆者が、若返法研究者であると云ふことゝ、境遇と、實地研究を必要とした(?)と云ふ樣なことが、相待つて、永年淋病に罹る可き機會に曝露されて、從つて、恐らく、現在六十四歲(昭和八年)に到る迄には、世の何人よりも多分に淋病の体驗を持つて居るので、此書は、少くとも淋病に關しては充分なる權威あるものとして信ぜらるゝことを讀者に先づ希望したい。

四

顧みれば、筆者が、最初、淋病に罹つたのは、恐らく、現代の多くの人々より

は、割合に年齢上から云えば遲くて、卅歳を越えてからのことであつた。而して、それ迄に、書籍や、新聞や、雜誌で、淋病のことを知り、且つ、他人から淋病に關する種々な話を聞いたので、該病が、如何に苦痛が伴ふことや、そして、それが容易に治癒することが困難であるばかりでなく、永く慢性的になりその結果、睪丸炎などを惹起し、子を産むことが出來なくなることや、而してまたその害が、子孫にも及ぼすことなどを聞いて居たので、最初淋病に罹つたときは、少なからず驚いた、乃はち、その當時、友人と共に、某所に遊びに往いてから四、五日を經過するに從つて、尿道に異樣の感を覺えると共に、漸次に、それが、ムヅがゆくなり、終に一種の痛みを感ずると同時に、尿道から、膿汁を漏らすに到つたので、さては話に聞き及んだ、淋病と云ふものかなと、

少なからず驚いた。況んや、その原因を自分で造つたことが、アリ〳〵と目の前に展開さるゝに於いておやだ。

五

然かし、最早や、出來たことは仕方がないと、自からあきらめ、早速、附近の醫者に往いて診察を乞ふたが、勿論、淋病で、内服藥を貰つて飲んで見たが中々容易に治らず、醫者は洗滌を勸めるけれども、それは筆者が拒絶して、筆者の信念に依り、何か、内服藥の作用で治療す可きものとして、經過を見て居た。然かし、醫者の内服藥では、到底あまり、効がなく、例の白檀油が、淋病に効があることは、古くから、一般に知られて居たし、且つはその當時から、色々な淋病の藥が、新聞や、雜誌の廣告にも出て居つたから、一つの研究的態度を

以つて、且つは、苦しまぎれに、それから、それえと、數種の賣藥をも、試みて見た。その体驗に依ると、淋病藥の多くは、第一甚だ飲みにくい藥であるしたとえ、それが、カプセル中に入れてあつても、一種の不快なる香が伴ひ、且つ、それ等の藥は、胃腸の機能を害することが多く、然かもそれ等の淋病に對する効果が一向に著しく顯はれないので、筆者獨特の食養法に依り自身にて、治癒せしめんと決心した。

六

淋病が、ゴノコッケンと名づけられたる一種の病菌の作用に基づくものであると云ふことは、相當、古くから知られて居た。乃はち、この病菌は、特に男子にあつては、尿道と、それに伴ふ膀胱、睾丸などの粘膜を侵し、女子にあつては、膣や子宮の内面を侵かすものであつて、その性極めて頑健で、一度侵かされると、容易にその菌が死滅しないのである。これは、現實に事實であつて、淋病の從來、世に行はれて居る如何なる方法を以つてしても、容易に治癒し難きは、それを證據立てゝ餘りがある。かゝることは、筆者の充分に、書籍や、他人の言で充分に知つて居たから、一旦、自分が愈々、淋病に罹つて見ると、始めは、相當、精神的にも、苦痛を感せざるを得なかつた。然かも、それが醫藥や、賣藥を用ゐて見ても、一向にその効能が顯はれないのだから、淋病に對する世人の言の僞りならざることを悟ると同時に、これは他力に依つて治癒するよりも、どうしても自分の力で治せなければならぬと決心したのであつた。それには幸ひにして、筆者は、食養學專攻のものであつたから、それに據るの

が最も近路で、且つ、賢い方法であると考えたのである。

七

而して、幸ひなことには、筆者は、大學に在學當時、當時の教師であつた獨逸でも有名な學者ロイブ氏から黴菌學を習つたので、一般黴菌の性狀を知り、明治卅三年頃、未だ我邦には、一つの纏つた黴菌學の本の無かつた當時、博文館の帝國百科全書中の黴菌學（四六判三百頁）の書を著はした位に、黴菌については、相當の智識を持つて居たから、その結果は、淋病其他の病菌に基づく種々なる病氣を治する一種の信念を得たから、かゝる自分の智識を應用して、自分の淋病を、自分で根治せしめ、且つ、將來、永く淋病の免疫的体質を得んものと企てたのであつた。元來、筆者は、先天的の性質として、他人の學說、其

他一般的の說には、容易に賛成せず、頑強に、自說を固執するの風があり、從つて自分の專攻たる健康、美容、治病、若返法などに關しても、自分の獨特の創說に依らなければ、承知が出來ない性質があるので、自分の直接に痛痒を感ずる淋病治療に關しても、自分の獨特の方法に據らんとしたのであつた、筆者は、現在では、勿論のこと、その當時から、他人の病を治すると標榜する醫者が、自分で、自分の病を治することが出來ずして、他の同業者に自分の病氣の治療を乞ふと云ふ樣なことの大々的に、不合理なことを考えて居つたから、そうゆふ樣な考も、手傳つたのであつた。

八

かく、筆者は、淋病に罹つた當時、すでに、相當、病菌に關する智識を以つて

居たから、今から、約廿五年前に「すべて、病菌に吾等が襲はれて害を受けるのは、吾等の身体の素質に、何等かの襲はれる丈けの欠陥があるからで、從つて、もしも、主として、食養法に依り、吾等の身体の組織若くは、血液の素質をして、病菌に侵かされざる樣な強健なものにするを得ば、自から、病菌を驅逐し、從つて、それに依る病を治癒し得る」と云ふ說を持して居た。かゝる論據に依り、苟も病菌に基づく病ならば、單に、淋病ばかりでなく、肺病でも、梅毒でも、その他の種々なる病をも、治し得る確信を持つて、その當時以來、現在に到る迄、その信念の確實なることを實證して來た。現今では、血液中の白血球が、病菌を喰ふと云ふことが、一般專門學者間に信ぜらるゝに到つたのであるが、この淋病の場合には、果して、この說を根據として、白血球を血液

内に增殖する樣な食物を攝取するが良いかどうかと云ふことは、筆者は、斷定はしない迄も、白血球喰菌說も、尙ほ、肺病の場合に於ける如く、相當、注意す可きものたることを玆に述べて置く。

九

思ふに、吾等の身体を構成する物質成分は現代の化學分析や動物試驗や其他の物理的方法を以つてしても、的確に判定することの出來ない性狀を有するものが、少なからずあつて、從つて、甲の人体と、乙の人体とは、當人の先天的素質、日常の食物、行動、職業、思想、精神狀態などの相違によつて、病菌に對する抵抗力の相違をも來たすのであるから、吾等は、出來る丈けの方法と、努力とに依つて、病菌に對する抵抗力を旺盛にしなければならぬのである。かく

して、もしも、目的通り、病菌に對する抵抗力を充分に獲得したならば、依つて、以つて、自然に、淋病などをも、征伏せられ得るのである、かゝる病菌に對する自然的抵抗力には、如何なる頑強な病菌も對抗し得ぬのである、それは頂度、神と、惡魔の戰に、結局惡魔が征伏せらるゝのと同樣である。だから吾等は、常に努力して、惡魔と戰ひ、惡魔を征伏するの態度を以つて、身体の攝生を怠らぬことを以つて念としなければならない。

十

近來人々が、性に目覺めたと云ほうか(?)或は其他の言葉を以つて現はし得るか知らないが、多年、種々なる間違つた頑迷固陋な思想の爲めに、性に關する諸般の事項が、著しく壓迫されて居つたのが、人類の自覺と共に、漸く、か

ゝる壓迫から開放されんとしつゝある傾向があり、古來の貞操觀念など、著しく變化し、夫婦關係を結べる境遇にあるものは、別問題として、獨身者などは、公々然と、娼婦に接するを普通のことゝする狀態にあり、學生の風態をして、公私娼家に出入して何等恥ずるところなきなど、今から、數十年前の筆者の學生時代の習慣と大いに異なるところがあり、所謂、性の本能に滿足を與ふることは、生理上、若くは、享樂上當然のことであると云ふ樣な思想の瀰漫から、著しく、淋病に惱むものを激增せしむるに到つた、乃はち、公私娼婦は如何なる嚴密なる官憲の檢査制度や、自分の攝生方法を以つてしても、それに接する公衆に向つて、淋病をバラ蒔くと云ふ狀況にあるのであるが、それでは、苟も、淋病を恐るゝ程のものは、かゝる娼婦に接しない樣にしたらよさ

そうなものだが、そこは、人類の本能如何ともし難く、且つ、又かゝる本能の滿足は、生理上、健康上、若くは、若返法上、乃はち、不老健康を期する上に必要であると云ふ學理さえあるのだから、吾等は、寧ろ、進んで、たとえ、淋病に罹つても、何等、痛痒を感せず、若くは、容易に、自力で、それを撃退するの方法を講ずるに如かずなことを考ふるのが、淋病に對する最良の方法であるかも知れない。

十一

かゝることを述べ來つた理由は、淋病は、到底、將來、如何なる方法を以つてしても、先づ當分は、人類社會から驅除絶滅することは、困難であり、寧ろ、その反對に、青年男女の多くは、一度はその洗禮を受く可き境遇に置かるるのだ

から、何人も、よく、思想的に、若くは、肉体的に、淋病に關する正當な智識を得て、自衛策を自から講ずるの必要を悟らしめんが爲めである、これを筆者自身について見るのに、筆者の祖父は、八十六歳、父は、九十一歳の壽命を保つて此世を終り、先天的に健康の血統であるに加ふるに、筆者は、青年時代から、健康生理の研究、体驗に沒頭し、先天的若くは、後天的に健全であつたが爲めに、六十四歳に到る迄幸ひにして、何等病氣と云ふ可きものを体驗することなしに過して來たに拘はらず、淋病丈けには、見舞はるゝことなしに經過し得なかつたのである、かゝる筆者の經驗を持つてしても、如何に淋病の普及性を有するかゞ明らかであつて、從つて、多數の人々は、その治療法を、最も、眞面目に研究す可きものたることを充分に悟つて貰ひいたい。

十二

さて、淋病に關する助言とも云ふ可きものは、これ位にして置いて、淋病治療本論とも云ふ可きものに入らんと思ふが、それについて、最初に、先づ、申述べたいことは、およそ、何れの病に罹つた場合でも、決して、あまり、あわてゝ、却つて、病勢を惡化する場合が多いと云ふ樣なことがあつてはならぬが、淋病に於いて、特に然りであつて、すべての病は、一定の期間を經過すれば、自然と、治癒す可き可能性と傾向を持つて居るのであるが、淋病は、かゝる傾向が特に著しいから、よくこの點に注意す可きだと云ふことである、乃はち淋病は、感染してから、約四、五日の後に、漸くその徴候を現はし、次第に、痛みを益し、膿汁を尿道より漏らし、小便をする度び毎に可なりの苦痛を感ず

るのであるが、かゝる苦痛を我慢して耐え忍んで居ると最初膿汁が出だしてから、約一週間位の後には、漸次に、その量が減少し、苦痛も漸減し、慢性狀態に入るのである。然かし、かく、すでに、淋病に感染して、多少の苦痛を感ずる時分に、脂肪分多き濃厚な飲食物を多量に攝取するとか、酒を飲むとか、性交を愼まず行ふとか、若くは、概して、淋病に對して、不良な飲食物を取るとか過度の步行運動をするとかする場合には、前記の淋病の自然的經過が不良になりて、苦痛益々劇しく、終には、堪え難くなりて、たとえ一時的には、病勢を良化するが如く見えても、胃腸を害したり、結局却つて、病勢を惡化する樣な醫藥、賣藥若くは、洗滌方法其他の方法を取る樣になつて、益々淋病の苦痛を增し、病勢を惡化する樣になるのが、多くの淋病患者の辿る經路である。

十三

從來、淋病は、種々の洗滌藥を用ゐ、一種の器械で尿道を洗滌することを良しとすることが、古くから唱えられ、且つ、行はれ來つたのであるが、筆者の研究の結果は、か丶る方法は却つて危險が伴ひ、百害あつて、一利なき極めて愚かなる方法たるを斷定せしむるに到つたのである、それは、乃はち、淋菌を却つて、奥の方えと進行せしめ、膀胱や睾丸の淋菌に基づく病を激發せしむるものたることはすでに、多くの淋病研究者の認むるに到つたところのことでもある。だから、か丶る危險なる行動は、決して取つてはならぬ、而して、また、筆者の研究体驗せる、範圍に於いては、現に、世に行はれて居る多くの淋病に關する醫藥賣藥は、殆んど、そのすべてが、胃腸の機能を害するものであつて

且つ、神經を不快に刺戟するものであり、榮養不良に導いて、全身の健康を害し、淋菌に對する抵抗力を減殺する等、これ等を用ゆること多く且つ永くして益々、それに伴ふて病勢を惡化するもので、筆者の体驗上、却つて、恐る可きものなることを斷言する。或は、また、近來は、淋病の熱療法なるものを唱える人があつて、淋菌は、熱に弱いから、成る可く、吾等の身体特に、局部の堪え得る範圍の熱を加えて、淋菌の撲滅を計ることを主張する人もある様であるこれは、一種の物理療法とも云ふ可きものであつて、洗滌方法や、藥劑療法にや丶勝ると思はる丶點なきにあらざるも、依つて、以つて、到底、淋菌を根本的に撲滅することは出來ざる可く、何れの方面から考察しても、淋病治療法としては、食養療法の安全にして、且つ、効驗的なるには如かないと云ふことが

出來るのである。

十四

要するに淋病は、急に治せんとしても、ダメである。生理上の他の方面にあまり害を及ぼさぬ程度に氣永く、適當なる食養法に依ることに依つて、イツとはなしに、知らず〳〵根治するものたることは、筆者の体驗上明らかである而して、淋病は、最早や、苦痛さえ去つてしまえば、たとえ、慢性的になつても、多くの人々の考ふるが如く、決して、生理的に恐る可きものではなくしてかゝる慢性狀態となるに於いては、たとえ、交接しても、相手方に害を及ぼすものでなく、且つ、出生兒にも、何等害を及ぼすものでもないのである。たゞ然かし、慢性的になつても、食養方法其他の一般的攝生方法が惡しければ、氣

候の變り目などに再發するの憂があるけれども、常に、食養法其他に注意して居れば、何等その害を受けることはないのである、從來、多くの場合に多くの人々に依つて、淋病があまりに恐れられ過ぎて居た、それは、淋病には、多少の苦痛が伴ふことゝ、そして、一旦、それに罹ると、病氣が頑强で、容易に治らぬと云ふ弱點に乘じて、主として、賣藥業者などが、利益の爲めに大ゲサにその害の誇大廣告を爲し、甚だしきは、淋病をば亡國病などゝ唱えて、世人をして、極度に、淋病を恐れしめ、その極、滑稽にも、淋病に基づく結婚解消問題などを世に提供して、三文雜誌記者などを喜ばしたと云ふ樣なことが起るに到つたのである。

十五

勿論、淋病は、上來述べ來りし如く、可なり苦痛が伴ひ、而して、中々頑健な病である、然かし、それは、淋病に伴ふ食養法其他の攝生法が不合理であるからで、治すに合理的方法を以つてしさみすれば、何等の苦痛が伴はず知らず〱治せらることは、筆者の多年に亘る研究と体驗とに依つて明らかである、然かも、筆者なども、未だ、淋病の經驗の淺い時代には、やはり新聞廣告などで、相當驚かされた、元來淋病の惡化、善化は、精神作用に依ること少なからず、それは淋病の局部が、極めて、神經の鋭敏な關係に依るものと思はれて淋病の際に、悲觀して幽欝に流るゝ樣な際には、病勢は、必ず惡化するを免ぬかれないから、淋病に罹つたとて、決して悲觀せず、成る可く朗らかな氣持で居ることが肝要である、すべて、何れの病氣でも、精神作用の影響を多少共受

けることは、人々の知るところであるが、淋病には、その影響が、割合に大であることは、爭はれぬ。

十六

例えば、淋病に罹つて、尿道がチク〱と痛み出したり、加ふるに、膿汁か、血を交えて、尿道から出たり、然かも、それが、種々なる方法を講じても、容易に治らなかつたりすると、大抵の人々は、著しく、悲觀し出して、この先どうなることかと、其悲觀の度が高まり、幽欝になり、心身共に疲勞すると云ふ樣なことが有り勝ちである、然かし、吾等は、かゝる際に於いても、こうゆふことを考えねばならない、幾ら病勢が強くとも、淋病は、もと、惡魔の使徒とも云ふ可き病菌の作用であるから、もし吾等が適當の方法を講じさえすれば

必ずや、その病勢を挫き、病菌を撃滅し得ると云ふことを、それは、チト、妙な例を引く様であるが、これを歴史上に見るのに、幾ら、ナポレオンの軍隊が強くて、天下無敵の如く見えても、もと、その軍の目的が侵略的で、惡魔の行爲を多分に含んで居つたのでは、到底永く、勝利を續けることが出來ないで結局、ロシヤ軍の軍略にかゝつてモスコーの大敗を動機として雲散霧消した如く、惡魔より出でたる强さは、到底、永くその榮を保つことの出來ない理をよく悟つて、徐々に、病菌を撃滅するの計を巡らさねばならないのである、だから、要は、淋病に罹つて、容易にそれが治らないからとて、悲觀してはならぬことをくれぐれも、茲に述べて置くのである。

十七

だんだん、淋病、治療上の要點に入つて來るのであるが、さて淋病治療の根本義とも云ふ可きものは、主として、食養の作用に依りて、淋菌を撃滅するに足る様な榮養分を身体組織に供給して、身体の根本的强健を計ることである、乃はち、この方法に依れば、淋病を驅逐すると同時に、身体が眞の健康体になるのである、ところで、吾等の身体が眞に健康であるか、否やと云ふことは、中々容易に専門家にも、分らず、また、その定義を、科學的に、說明することも困難であるが、要するに病菌に侵かされざる身体が眞の健康体だと考えて差支えない、かく、病菌に侵かされざる身体を得ると云ふことは、中々、困難なことであるが、その方法の說明は、後に述べることにして、かゝる健康体を得る第一歩として、先づ、第一に、眞の健全なる胃腸を得ると云ふことである、筆

者が、多くの淋病藥の、却つて、有害なるを說くのは、實に、それ等が胃腸の機能を害する點が多いからである、而して、この、胃腸を健全に保つと云ふことが、實は重大問題であつて、世には、胃腸病治療專門の病院があつても、その院長それ自身が、胃腸病で死んだ例がある位だから、胃腸を健全に保つことの如何に、六ヶ敷いことであるかを、人々は、知らねばならぬのであるが、その胃腸強健法を可なり詳細に、こゝに說明するのは、紙面の許さぬところであるから、それは、ヌキにするが、讀者は、筆者の以上の說明に依り、淋病の際には、先づ胃腸を健全に保つ必要のあることを充分に悟つて置かれたい、そして、胃腸の強健法について、筆者の說の詳細を知りたい人は、小石川區丸山町十一大日書房發行の拙著、胃腸食養強健法を讀まれたい。

十八

次に、淋病の際に有害なる飲食物の種類を擧げると、

イ、牛豚肉、鷄肉、脂肪多き魚肉、

ロ、天麩羅、壽司、

ハ、カラシ、胡椒等の香辛料（西洋料理に用ゆるソースは、種々の香辛料を含むに依り、成る可く用ゐぬが宜し）

ニ、酸味多き果物、酢の物、

ホ、酒類、

ヘ、濃厚なるコーヒー、紅茶、コヽア等、

要するに、淋病の際には、すべて、脂肪や、蛋白質をあまり多量に含む、普通

に、所謂、濃味のものは、不可で、從つて、概して、西洋料理は、成る可く控え目にしなければならぬ、これ等のものも、勿論、絕對に惡しいと云ふのではないが、淋病の病勢が旺盛であつて、從つて、苦痛甚だしき際には、嚴に、これ等のものを用ゆることを愼しまねばならぬ。

而して、牛乳や、卵の如きものは、その成分や、性質上から云へば、淋病にあまり良いものではないが、病勢に應じて、よく、その分量に注意して用ゆれば差支えがない。

概して、普通に、從來の多くの榮養學者が榮養豐富と唱えて居る種々なる食品は、淋病には、禁物で、彼の八ッ目鰻とか、普通の鰻、鯨肉などは、極めて良くない、種々の方面から考察すると、ヴイタミンAは、淋病には宜しからずして

ヴイタミンBは、種々の意味に於いて、淋病治療に効がある。

次に淋病の際に用ゐて良いものは、

イ、麥飯、玄米等の如きヴイタミンBの豐富なるもの、

ロ、種々の野菜類特に、大根、ウド、アスパラガス、瓜類、青菜類等の如きもの、

ハ、甘味多き果物例へば、バナヽ、柿、桃、梨、葡萄等

ニ、麩、パン等、

ホ、小豆の餡を用ゐた種々の菓子類、

ヘ、生水、若くは、白湯、

以上のものは、大体に於いて淋病の際に用ゐて良いものであるが、それも、人

く々の体質、嗜好、年齢等に應じて、その用法や、分量を異にす可きもので、特に淋病の病勢に應じて最も、その用法に注意しなければならぬ。

十九

以上は、淋病に對しての大体の食品の良否の概要を示したものであるが、淋病の病勢惡化したとか、劇烈な塲合には、どうしても、成る可く菜食にした方が良い。而して、從來、一般的に菜食と肉食の生理上の可否について議論の多いのであるが、その良否は、時と場合とに依りけりで、前述の如く、淋病の劇烈なときは、絶對菜食を良しとし、すでに、慢性になれる塲合は、少量の肉食を用ゆるのが良い、然かし、菜食と云ふても、その範圍中々に廣く、それを説明する丈けでも、數百頁の本が一冊出來る位であるが、淋病の塲合には、大体に

於いて、成る可く種々の野菜類を自分の嗜好に適する様な料理にして用ゆるを良しとするのである。然かも、この菜食をすると云ふことが、中々、多くの人々には、實行困難であるが、淋病を根治せしめんとするには、どうしても、實行しなければならない。

而して、普通菜食と云ふても歐米諸國で菜食と唱えるものは、必ずや、多少の牛乳や、卵を用ゆるのであるが、淋病を治するにはこれ等のものを用ゆるも良くない。

多くの人々は、菜食は、概して、身体を榮養不良に導くと云ふて悲觀する傾向がある様であるが、かゝる心配は無用で、菜食の中にも、大豆其他の豆類、豆腐、トロ、芋、麩などの様な蛋白質や、脂肪に豊富のものが相當にあるから、

これ等のものを巧みに用ゆることを勸めるのである。

二十

菜食が、何故に淋病に有効であるかと云ふことは、筆者には、充分、其理由が判つては居るが、それを詳細に説明することは、紙面が許さぬから、省略するが、大要を述べると、概して、菜食の材料とす可き食物の中には、腎臓、膵臓胃腸、肝臓等を自然的に强健に導くもの多く、從つて、これ等を巧みに用ゆることに依つて、全身の健全の度を增し、依つて、以つて、病菌に對する身体の抵抗力を增すから、結局、淋病に効あるものと考へて差支えがないのである。然かも、菜食材料の範圍に入る可き種類のものは、その數、極めて多く、例へば、普通に漢藥として考へらるゝものもあり、その中には、特に白血球を增加

するものなどがあつて、かゝるものを用ゆる塲合には、淋病に對するその効、特に顯著なるものがある。尙ほ菜食が、何故に、淋病に効多きやと云ふ理由は他に種々あるから、淋病を根治せしめんとするには、どうしても、菜食に傾く必要があるが、それを實行するのが中々困難ある。然かし、かゝる困難は、一種の信仰に依つて、打ち勝たる可きもので、淋病の苦痛と、菜食の苦痛とを、よく比較して、淋病の苦痛から、逃れんと欲するには、この信念に依りて、菜食を實行しなければならぬ。

二十一

而して、菜食も、料理の方法に依つては、決して、マズイものでなく、昔から我東洋に行はれて居る精進料理などは、この菜食料理の進步したものであるが

かゝる精進料理を、よく參考として、淋病の際に巧みに用ゆることは、誠に有効なことである。筆者は、兼ねてから、病院は同時に、料理店である如く、若くは、それ以上に料理のことを研究し、美味の料理を造らねばならぬことを主張して居るものであるが、特に、淋病の如く、菜食を必要とする場合に於いて然かりであつて、少くとも、淋病を憂ふる人々は、よく、この點に注意して、料理の作用に依つて、菜食を美味のものたらしめて、單に一時的でなく、病氣の治する期間は、菜食を攝取する樣にしたいものである、前記の淋病に良いと述べた種々なる野菜類、例へば、大根其他、ニンジン、牛蒡の樣なものでも、その料理方法さえ宜しければ、何れも、美味なものとなるのであるし、また、その料理方法の如何に依つて効力が多くなるのだから、病人は、かゝる點によく注意しなければならない。

二十二

上述し來つた如く、淋病を治するには、菜食を良しとするのであるが、それにも増して特に淋病治療に對して重要なることは、飲料の種類と、その分量のことである。元來、淋病は、尿道の病氣であつて、その尿道は、成る可く頻繁に、自然の尿に依つて洗滌せらるゝを必要とするのである。乃はち、淋病の際に、尿量が多くして、頻繁に利尿すると、却つて、それに依つて、苦痛を輕減し、且つ、病菌の勢力を減殺するのである、先きに或る專門醫は、内服藥の作用に依つて、特に尿中に殺菌的成分を含ましめ、以つて、淋菌を撲滅せんと企てたことがあつたが、かゝる方法は、身体生理上に種々なる惡作用を及ぼして

却つて、害がある。筆者の意見では、かゝる方法を取らなくとも、尿には、自然に殺菌的成分を含み、然かも、その成分は、主として菜食をするとか、また良好なる食養方法に依つて、増加する傾向があるのだから、やはり、この點から考察しても、淋病治療に、如何に食養方法が大切であるかゞ明らかである。

而して、利尿の量を多からしむるには、如何なる方法に依るが最良であるかと云ふに、もしも、胃腸の機能が健全でありさえすれば、單に、生水や、白湯を多量に飲みさえすれば、其目的が達せらるゝけれども、吾々の身体生理は、種々の場合に於いて、そう簡單に考ふることは出來ず、飲料の適用に依つて、胃腸を害し、たとへば、下痢をすると云ふ樣なことがあれば、却つて、尿の量を減じ、且つ、尿が濃厚となつて尿道を刺戟し、甚だしき苦痛を感ずると云ふ樣

なことがあり得るから、この點を、よく、考慮に入れなければならぬ。

二十三

要するに、淋病の際には、その病勢に應じて、尿を、如何にして、一般生理を害することなくして、多量に出すかゞ重要な問題である。尿は、勿論、直接に生理上腎臓で製造さるゝのであるから、この大切な腎臓に故障があれば、適當に尿の排泄さるゝことは出來ない。されば、淋病の治療には、腎臓の機能を旺盛にすることも、必要である。また、胃腸の機能の旺盛を計ることの必要なるや、云ふまでもないことであり、それと連關して、心臓や、神經系統の健全が必要であつて、かくの如く、内臓諸器官の機能が旺盛であつて、而して、適當なる飲料を適量（多量を意味す）に用ゐて、利尿を多からしむると云ふことが

根本的に淋病治療上必要なのである、乃はち、別段に、特殊の薬剤を用ゐて、尿に殺菌的性狀を帶ばしめなくとも、普通の健康体の尿なれば、充分に殺菌的効力を有するのであるから、その自然の洗滌に依つて、漸次に、淋菌は、確實に、撲滅せらるゝのである。

二十四

然かも、この、刻々に、体内にて腎臓に依つて發生せらるゝ尿の性質は、日々の食養方法の作用に依つて、大いに異なり、淋菌を撲滅する効力に多少を生ずるのだから、淋病の際に於ける食養方法が、極めて、大切だと云ふのは、實にこれ等の理由に基づくものである、上述した如く、淋病の際には、概して、菜食に傾く方が良いと云ふたのも、やはり、菜食に依る尿が、然からざる場

合より多分に殺菌的性狀を有するに由ると云ふことが出來るのである。然かも一口に、菜食と云ふても、その範圍が極めて廣く、例へば、麥を喰べた場合と米を喰べた場合と、蕎麥、玉蜀黍若くば、その他の穀類を喰べた場合と、或は大根、ニンジン、牛蒡、馬鈴薯其他の野菜類を用ゐた場合とは、自から、尿の性狀成分に、差異を生ずると云ふ様な極めて、複雑なる關係があるから、これ等の點をよく考へて、日常の食物を撰ばねばならぬ、概して、筆者の体驗に依ると尿に殺菌性を多分に帶ばしむる食物は、

ヴイタミンA、B、C、Dなどを割合に多量に含む植物質食品であつて、

從つて、海苔、ニンジン、ホウレン草、麥、甘味多き果物、茸類

と云つた様なものは、成る可く、多量に淋病の際に用ゆるを良しとする、然か

し、すでに、度々申述べた如く、吾等の食物に對する嗜好たるや、極めて複雜であつて、同一の限定されたものを、永く續けて食することは、實際上行はれ難いのだから、何れの塲合たりとも、食物の調和と云ふことが必要である。

二十五

以上述べ來つた樣に、淋病治療に最も、大切なることは、要するに、殺菌成分を、成る可く、多分に含んだ尿を多量に、然かも、繼續的に、絶えず排泄する樣にすることである、例へば、夜中、就寢した塲合でも、少くとも、二、三時間毎位に排尿するを良しとし、かく頻繁に排尿しては、睡眠に妨害を與えるであらうと考へらるゝが、然かし、それは慣るゝと、左程苦痛でなく、また、それが、決して、生理上、害のあると云ふ樣なこともない。

かく、頻繁に排尿することが、淋病治療上必要なることは、確實なことで、彼の淋病の際に、頻りと頻繁に尿意を催ふするも、實は、自然的療法の一つと見做す可きもので、かくして、自然は、淋病を治癒せしむるの意に外ならぬのである。筆者の主張するこの淋病獨特の療法は、『排尿療法』とも云ふ可きもので、これは、やはり、自然の作用に則つたものに外ならぬのである。然かも、かく、頻繁に排尿することに依つて、著しく、淋病の苦痛を和げ、却つて、爽快を感ずる樣な塲合さえあり得るのである。

ツラ〳〵考ふるに、自然が、淋病を、吾等に下し、淋菌の繁榮を來たさしむる眞意は、中々〳〵に意味深長であつて、淋病は、吾々に、或る程度の節慾と、身体の健康法とを敎え、而して、局部の發育をも促がすものである。乃はち、淋菌

に依つて、局部が、種々の作用に刺戟を受け、依つて、以つて、その部の發育が遂げらるゝと云ふ様なことが考へられ得るのである。

二十六

觀じ來れば、すべて病氣は、自然が、吾等に與えたる一種の訓戒、若くは、刺戟とも云ふ可きものであつて、もしも、吾等が、よく、その天意を悟つて、謹愼す可き場合には、謹愼し、また、自然的に、種々のそれに對する合理的方法を行ふ場合に於いては、よく、それを行ふ場合に於いては、乃はち、禍を轉じて福と爲すと云ふ諺の如く、吾等は、依つて、以つて、却つて、將來の幸福を招來することが出來るのである、されば、淋病のなどにも、よく、この理を悟つて、氣を永くして、倦まず、アセらずして、適當の方法を盡して、行

動するに於いては、却つて、淋病に依つて種々の眞理を發見することが出來るのである。なぜ、かゝることを述べたかと云ふと、實際上淋病は、中々頑强の病氣であつて、如何なる方法を以つてしても、一氣呵成に治す可きものにあらず、アセつて種々の方法を取れば取る程、却つて、病勢を惡化する場合が極めて多く、從つて、筆者が本書に全体を通じて述べる、食養法を守つて、忍耐して、自然的治癒を待つことが、最良の方法と考へるからである。乃はち、たとへ、淋病が急に治せなくとも、そこに、別段苦痛を感ずることがないならばそして、それが、生理上大した害がないならば、早急に、それを治する何等の必要を認めぬからである。

二十七

普通の場合に於いては、淋病は、健康体に於いては、それに罹つてから、約一週間乃至十日間位で、膿汁が止まり、若くは、少くなり、苦痛も、また輕減するを常とするが、それが、もしも、食養方法が、惡しかつたり、尙ほ、交接を過度に行つたりすると、病勢が惡化して、苦痛も、また、劇しくなるのである而して、淋病は、一旦、治して居つても、また、再三、再四、發病することがあると云ふのは、花柳界に出入したり、公私娼婦、若くは、藝者、女給其他の淋病所有婦に接すれば、また、容易に發病するものである。然かし、一度淋病の經驗あるものは、そして、食養方法に依つて、自然的に、それを治した經驗のあるものは、よく、病の經過が分り、それに對する方法を講ずれば、また、容易に治せらるゝから、あまり、苦痛を感せないし、從つて、何等の心配はない。

而して、筆者の經驗に依ると、淋病に度々、罹ると、漸次に身体が免疫性になることは、確かである。だから、淋病の經驗を重ぬるに從つて、益々、それは何等、恐るゝに足らぬ樣になる。乃はち、淋病は、恐る可きものとして、ビク／＼して、神經を惱まし、それが爲めに、却つて、病勢を惡化せしめるよりも、事實上、何等、恐るゝに足らぬものとして、徐ろに自家食養療法を行ふのが良いと云ふことになるのである。

二十八

さて、次に、讀者に、淋病治療上の要領を、容易に得せしむるが爲めに、それを個條書きにして示すことにしやう。

第一、淋病は、ゴノコッケンと云ふ一種の尿道其他膀胱、睾丸などの尿道附近の器官を侵かす病であつて、主として、淋菌を有するものとの交接に依つて起る。

第二、交接以外に、淋病の起ることが唱えられることがあつても、それは、極く稀で、先づ、淋病は、交接のみに依つて起るものと、見て差支えがない。

第三、從つて、淋病の豫防としては、淋病の恐れある異性と交接をしないのが最良の方法であるが、それは、現在並びに將來に亘つて、何人にも到底、行はれ難いことであるから、それよりか、どうしても、淋病を容易に治療する方法を講ずる方が餘程賢い。

第四、淋病を不治の病として、あまり、恐れ過ぎる結果は、例の一時世の噂に上つた寧ろ滑稽なる結婚解消問題などを起す様になつて、誠にみつともないことがある。單に、合理的方法を以つてすれば、容易に治せらる可き淋病を結婚解消の理由とするなどは、全く、笑止の至りである。

第五、世には、主として、花柳病を目標として、結婚前に、相互に健康證を取りかわすことを主張する人もある様だが、ソンナ事をしたとて、結婚後に淋病に罹らぬとも限らぬし、かゝることは、到底、行はる可きことではない。やはり、淋病は、治するに、その方法を以つてすれば、何等恐るに足らぬものと考ふる方が良い。

第六、淋病豫防法として、サック、種々なる洗滌藥、ソウ入藥等があり、特にサックは、避姙法をも兼ねるものとして、用ゐられて居り、その種類も現に

澤山あるが、このサックは、女の方には、あまり障害にならぬか知らぬが男の方には、却つて、不愉快を感じ、生理上良いものでなく、決して、世に推奬す可きものではない。

第七、淋病治療の第一義は、殺菌性を多分に帶べる尿の成る可く多量の排泄である。

第八、殺菌性を帶べる多量の尿の排泄は、身体の健全特に内臓諸器官中にても腎臓の健全と、胃腸の堪え得る範圍内に於いて多量の水分乃はち、飲料の攝取と云ふことが必要條件である。

第九、淋病の際に於ける好適の飲料は、生水、白湯、麥湯、ハブ茶（特に支那廣東から直輸入して、現に、横濱市中區紅梅町一ノ十六川崎平和堂藥局から

發賣して居る『廣東ハブ茶』と云ふものが最良である）何首烏湯（これも、前記川崎平和堂で支那から直輸入して發賣せる何首烏の煎汁）ドクダミ、ゲンノシヤウコ、ソーダ水、甘酒、飴湯、淡き珈琲、健康番茶（健康之代理部より發賣せるもの）氷水（夏ならば）砂糖水（單に砂糖を溶解せしめたもの）種々のサイダー類、種々の果物水、（これは、成る可く甘味多きものを用ゐ酸味を帶ぶるものは宜しからず）

第十、なせ以上の如く、淋病の際に用ゆ可き飲料の種類を澤山擧げたかと云ふと、人々は、先天的、若くは、後天的に、嗜好が異なり、淋病治療の如き長期に亘るものは一種の飲料では飽きが來るし、且つ、また、時々の飲料を代えて用ゆる方が生理上良いからである。

第十一、飲料と連關して、淋病の際に好適なるものに、料理の一部として、スープ、吸物、ゴッタ煮、重湯、粥、オートミールなどの多汁なる食品がある我邦に、西洋料理は、可なり流行しても、それは、未だ、本當の西洋料理ではなくして、片輪の西洋料理であるから、未だスープなどに重きを置くところ迄は到らぬが歐米諸國の本塲の西洋料理には、スープは、イツも、無くてはならぬ附き物で、從つて、西洋料理特に、佛蘭西料理などには、非常に貴ばれて居つて、その種類も、極めて多く、數百種からある。かゝるスープの多くは、榮養上、眞の價値のあるものであるが、それが、淋病に良いと云ふのは、かゝるスープが、生理上、眞に良い、成分を含むと同時に、多分に、水分を含み利尿を促がすからである。だから、淋病の時には、特に種々のス

ープを用ゆるを良しとし、その最良なるものは、大根、ニンジン、馬鈴薯などを用ゐた野菜スープである。

第十二、我日本料理の吸物は、頂度、上述のスープに相當するものであつて淋病の際には、成る可く、これを用ゆるが良い。而して、我吸物の種類も極めて、多く、例の鯛の目玉の吸物から、大根や、葱や、菜葉を用ゐた吸物に至るまで、その種類が澤山あつて、何れも、その水分を多量に含み、利尿を促がすと云ふ理由を以つて、時と塲合に應じて、淋病の際に有効であるが、やはり、成る可くは、野菜を材料とした吸物を用ゆるを良しとする。而して我邦には、世界の何れの邦土にも勝りて、美味なる小魚が多いから、それ等を巧みに用ゐて、よく嗜好に適する樣にして、常に、多量に用ゆるが良い。

第十三、ゴッタ煮と云ふのは、普通に大根、ニンジン、牛蒡、コンニヤク、里芋などを材料とした多汁の煮込み物を云ふのでこれは、その材料の關係から淋病の際などに、特に、推奬す可きものである。これは、一般食養療法から云ふても良いものである。

第十四、重湯は、何れの場合にも好適のものであるが、特に、淋病の際には良いものである。

第十五、粥は、我邦で、古くから一般病人に用ゐらるゝものであるが、特に、淋病の劇しき際には好適のものである、その理由は色々あるが、やはり、それが、水分を多量に含みて、利尿を促がすのと、且つ、人々の嗜好に適するからである。

第十六、オートミールは、歐米人の常に多く用ゆるもので、我邦の粥に當るものであるが、元來、その原料たる燕麥は、古くから、一種の精力劑と云はるゝ位に、特殊の精力劑的成分を含むもので、淋病の際などには、特に有効である。

第十七、牛乳は、普通に、所謂、滋養成分に富み、加ふるに、水分をも、多量に含み、淋病に好適の飲料であると、人々に、考えられそうであるが、元來現代に學者の一部に依つて、唱えられて居る榮養學說は、間違ひだらけであるし、從つて、單に、滋養成分と云つたとて、それが、果して、どうゆふ意味か明らかでなく、現に、一個の榮養學者を以つて、自任する筆者などは、現代の多くの人々に依つて、考えられて居る榮養學說には、寧ろ反對の點が

多いのであるが、かゝる見界から考察すると、牛乳は、淋病の際にはあまり良くない。その科學的理由は、種々あるが、要するに、牛乳には、多量の水分と共に、また、多量の脂肪と、蛋白質とをも含み、その成分が淋病の際には、濃厚に失すること、尙ほ、すべて、肉類其他、脂肪分の多い魚類が、淋病に有害であると云ふのと、同樣の理を含むのである、この牛乳が、淋病に良くないと云ふ說などは定めし多くの醫者などが反對するであらうが、筆者は、斷乎として、以上の筆者の說の確實なることを述べて置きたい。

第十八、生水、並びに、白湯は、成る可く淋病の際に多く用ゆるを良しとする

近來。この生水や、白湯を用ゆることの一般の人々にも生理上良いことが唱えられ、頻りと、その飮用が推奬せらるゝのであるが、筆者も、その說には

大体贊成である。然かし、その分量は、日々、ドレ丈けが適當であるかは、人々の年齡、体質、氣候其他の種々の關係に依つて異なるし、また、そう、ムヤミに多量に飮むことは多くの人々の堪え難いところであるから、人々の胃腸を害せざる範圍、若くは、飮用に堪え得る範圍内に於いて、生水を用ゆるを良しとするが、淋病の際には、特に、成る可く注意して、多量に飮用するを良しとする、色々この生水飮用法を研究すると淋病生水療法とでも云ふ可きものが出來る位である、それは乃はち、如何なる方法に依つて、より多量に生水を飮用し得るかと云ふ問題であつて、これは相當研究する價値があると思はるゝ。

第十九、茶、珈琲などは、成る可く用ゐぬが良い。特に、其の濃厚なるものは

良くない。茶の生理上の利害得失については、從來、色々な人の説がある樣であるが、筆者の説では、茶は、一般、生理上良くないし、特に、淋病の際には用ゐぬが良い。珈琲は、濃厚ならざるものは、適宜に用ゐて差支えない然かし、茶でも、珈琲でも、一種の嗜好品であつて、それを嗜好する人が適當に用ゆる場合には、生理上、惡しくないのだから、その意味で用ゆるのは差支えない。倘ほ、コ、ア、紅茶なども、その通りで、あまり、濃厚ならざるものを適量に用ゐる場合には、別段害はなく、却つて、有効な場合もあり得る。

第廿、淋病の際に何人が用ゐても、効能の多く、且つ、安價で最も民衆的ものに麥湯がある。淋病を憂ふる人は、常にこれを用ゆるを良しとする、麥湯

は、よく、人々の嗜好に適し、ヴイタミンBを割合に多量に含み、利尿を良くし、常にこれを用ゆるも倦くことなく、最も、淋病に理想的飲料と云ふことが出來る。

第廿一、ハブ茶は、近頃、急激に我國に廣く用ゐられ來つたのであるが、これが、支那から最初我邦輸入されたのは、大正十年頃で、それは、横濱市中區紅梅町一ノ十六川崎平和堂藥局が實はその元祖である、現に、その優秀品を廣東ハブ茶の名稱で發賣して居るのである。僅々、十年間位で、かくも、早くハブ茶が急に廣く用ゐらるゝに到つた理由は、それが事實上、諸病に有効だからである。乃はち、その香味も惡しくないに加ふるにそれが、腎臓病、胃腸病、心臓病其他内臓諸器官の病氣の特効藥と云はるゝ位に効驗著しき

のみならず、淋病薬としても、誠に有効なところから、人々、相傳えて、別段廣告をしなくつても、急に現在の如く普及するに到つたのである。而して實は、筆者は、その宣傳に預つて、少なからず効のあることを自分から茲に吹聴して置く。このハブ茶は、我邦でも、少量は、地方に依つて自生のものを用ゐて居たのだが、それは『醫者イラズ』『醫者殺し』などの名稱の下に用ゐられて居つた者である、其意味は、餘程諸病によくキク處から誰云ふとなく、斯る名稱が附せられた者であらう。此ハブ茶特に前記廣東ハブ茶を淋病の人々に推奬して置く。現在では、ハブ茶は、我國產の物も大分ある樣であるが、支那產に比すれば、効能が少く、味も惡しく其大部分は眞のハブ草の種實でなくして、エビス草と云はるゝ者の實で効能は甚だ少い頂度人參が

内地產よりも、朝鮮產のものが効能が多い樣なものである。

第二十二、ドクダミは、漢藥の一種として。極めて、古くから、我邦に用ゐられ、これは、主に、花柳病に効あるものとされて、花柳界の人々に多く現在でも用ゐられて居る。而して、此ドクダミは、胃腸病心臓病などにも効があり、特に、淋病に効あるものとされて居る、近來は、一種の强壯劑とさえ考えられて一部の人々には倘ほ、麥湯の如く常に用ゐられて居る。筆者も時々用ゐ、特に淋病の際に用ゐて、その効のあることを体驗して居る、ドクダミは、原野に自生して居るものを用ゐて居たが近頃は、需要が多くなつて、栽培されて居る、そして、これは、生の場合には、惡臭があつて、用ゐ難きが如きもこれを、乾燥して、茶の如く、煎じて用ゆる場合には、惡臭なく、誠

に飲みよいものである。すべて、これ等の漢藥なるものは、その作用は、洋藥の如く、急に顯はれなくとも、副作用がなく、然かも、その效果が確實である。而して淋病などの際にも、氣永く用ゐて居ると、その效果は、確實に徐々に現はれて來て、苦痛を減ずる効が少なからずある。

第二十三、グンノシヤウコは、元來、普通に胃腸病に効あるものとして用ゐられて居るが、淋病にも、效果が少なからずある。

第二十四、飴湯、砂糖湯と云つた樣な甘味のものは、淋病の際に用ゆると良いそれは、元來、淋病には、酒類を用ゆることは惡しく、從つて、生理上、自然の要求として、これ等を用ゆるのが良いのである。要するに、すべて、甘味多き飲食物は、淋病の際に、その効が少なからずあるのである。

第二十五、酒類が、淋病の際に、生理上良くなく、その病勢を惡化することは科學上、若くは、体驗上明らかであるから、勿論、用ゐぬ方が良い、然かし淋病は、慢性的の場合多く、數年間を經過することさえあるから、かゝる長期間、飲酒家が、禁酒することは、事實上、出來難い事であるが、淋病の病勢が、惡化して、苦痛を甚だしく感せない限りは、少量を用ゐても、別段に害はない。特に、ビールの如く、アルコール分が漸く、三、四パーセント位のものなれば、却つて、利尿を促がして、淋病治療に有効な場合さえあり得るのだから、要は、病勢の如何と、酒の種類に依つて、その利害が定まるのだから、酒類が、淋病に絶對に有害と云ふことは云はれない。

勿論、何れの場合たりとも、苟も、淋病が根治して居ない際には、大酒の有

害なるは、云ふまでもないことであるし、特に、春秋に於いて、慢性淋病の擡頭し易い場合には、大酒若くは、飲酒は、愼しむにこしたことはない、世には、一方に、淋病の藥を用ゐたり、若くは、淋病に對する手術を施しながら、尚ほ、飲酒を續ける人がある樣であるが、かゝることは、斷じて良くない。

而して、ウイスキー、燒酎と云つた樣な强烈の酒類の淋病に惡しきことは、云ふまでもないことであるから、これ等は、どうしても愼まねばならない、

第二十六、淋病の際には、酸味强き飲食物は愼まねばならない。乃はち、酢の物、壽司、酸味多き果物などは良くない。

第二十七、瓜類乃はち、胡瓜、西瓜、メロン其他のものは、淋病には、概して

好適の食物である、これ等は、利尿を促がし其他の意味に於いて淋病治療上有効である、これ等も、胃腸を害せざる範圍に於いて、多量に用ゆるも差支えがない。

第二十八、淋病の際に蛋白質などを割合に多量に含みて、普通の意味に於ける滋養食物とも云はるゝものは、大豆、麩、豆腐、小豆などの豆類、ハンペン納豆等である。

第二十九、すべての香辛料、例えば、胡椒、カラシ、唐辛、生薑と云つた樣なものは、淋病の際には良くない。

第三十、胡麻は、植物質食品中豆類に次いで、脂肪や、蛋白質に富み、種々の理由に依つて、淋病の際に用ゆると良い。例えば、當り胡麻（これは、胡

麻の皮を剝いて、特殊の器械で、磨り潰した、專賣特許品で、京橋區南小田原町胡麻屋商店で發賣して居るもの）を適當に、白湯で解いて牛乳の樣にして、適量の砂糖を入れて常に用ゆることなどは良い。

第三十一、古くから、漢藥中の何首烏とて用ゐられ曾て不老長生藥として、世人の注意を引いたものは、一名ツルドクダミとさえ云はるゝ位に、ドクダミの一種であつて、これを煎じて用ゆることも有效である。（この何首烏の優良なるものは、前記した横濱中區紅梅町川崎平和堂藥局にある）。

第三十二、元來、淋病は、慢性的のものであつて、どうしても急速に治療困難であり、然かも、たとえ、それが根治しなくとも、別段、何等の苦痛と、生理上の害のなきものであつて、從つて、時としては、病勢が惡化するとか、

若くは、初めて淋病に罹つた初期の外は、大なる苦痛を感ずるものではなくかく、甚だしき苦痛を感じさえしなければ、少量、適量の肉食も、魚食も、その他の濃厚成分の食品も、大なる害はないのであるが、然かし、多くの人々は、病勢惡化の際乃はち、甚だしき苦痛を感ずる際に、普通に所謂滋養物と稱せられて肉類、卵、牛乳其他の濃厚成分を有するもの、若くは、これ等を材料とせる西洋料理や、支那料理をば、却つて、淋病治療に効あるものと信じて滋養劑として用ゆる場合が少なからずあり得る。乃はち、筆者の上述し説明し來つた菜食に反對の方向を辿る人々があり得る、實は、筆者も、今から、數十年前に最初淋病に罹り、未だ、眞のその食養療法を悟らざりし時代には、實に、その一人であつた。

かゝる体驗と、而して、數度に上る、相當、劇しき淋病に罹つた經驗が、上述の筆者獨特の淋病食養療法を案出せしめたのであつた。

第三十三、チト、妙な例を引く樣であるが、社會で、種々なる法律上の罪惡を犯し、酒色に身を持ち崩し、その當然の結果として、劇烈なる淋病に罹つた人々が、刑務所行きを餘儀なくされた場合には、淋病は、自然に治することを聞くが、それは、刑務所では、酒や、煙草や、夜ふかしや、女色に溺れることから、絕對に禁ぜられ、これを生理上の眞の健康法から見れば淋病治療上、寧ろ理想的であると同時に、刑務所の食物が、必要上、菜食に流れ、麥飯であるなど、何れも、淋病治療上に好條件の事ばかりであると云ふことが知らず知らず淋病の自然療法となる結果である。

されば、およそ、世の淋病を憂ふる人々は、かゝる刑務所生活を標準(?)として、出來る丈け、その理想を實現する樣に勉むれば、淋病も、自然、恐れを爲して、自から退却すること疑ひない。

然るに、世の多くの人々は、かゝる理想的(?)の生活から、成る可く遠ざかつた不養生生活をして、淋病を治せんが爲めに、却つて、淋病それ自身其他生理上有害な藥劑を用ゐたり、其他の方法を取つて、二重に、淋病の病勢を惡化する方法を取るのだから、淋病の治らぬのは、當然である。

されば、それに對して喜ぶものは、醫者と、淋病の藥を賣る賣藥業者、若くは、淋病治療器などゝ唱えて、筆者の目から見れば、誠に怪しげなる器械を賣る人々である。

淋病患者は、この上記の文により最大の注意をしなければならぬ。

第三十四、吾等の身体には、粗衣粗食が、必ずしも良いのではないが、多くの人々は、美衣美食の用法を誤まれる結果は、却つて、粗衣粗食の方が健康上有効の塲合が多い樣に見え得ることがあるのである。特に、この言葉は、淋病の塲合に適當であつて、美衣美食を巧みに用ゐると云ふことは、寧ろ、困難であるから、多くの人々は、少くとも、淋病の際には、粗食の方が効果のあることが確かなのである。

チト、話がワキ道にそれる樣であるが、筆者の硏究体驗するところでは、一般生理上から見て、木綿が衣服としては健康上最良であり、麥飯が米飯に勝ることを斷言する。木綿は、絹布や、毛布に比して、粗衣であり、麥飯は、

米飯に比して、普通の意味に於いて粗食である。筆者の粗衣粗食が却つて健康上良いと云ふたのは、かゝる意義を指すのである。

以上三十四項に亘つて、淋病に關して食養療法の大要を記し終つた樣であるが思ふに、食物の種類たる實に多數多樣であり、また、例えば、大根なら、大根のみの料理法の種類も、實に多樣であつて、從つて、吾等の口にす可きものゝ範圍たるや、極めて廣いのであるが、何れの塲合たりとも、あまり、脂肪や、蛋白質に富みたる所謂、濃厚なる、成分を有するものは、淋病の塲合、特に、その病勢の劇烈なる塲合には、よくないから、どうしても、これを愼しまなければならない。然かし、それ以外のものならば、嗜好に應じ且つ上述したところを標準として何れのものを撰び用ゆるも、差支えがない。

而して、尚ほ、淋病とホルモンとの關係については、重大なる事項があるからそれに關して、特に以下に述ぶることにする。

二十九

近來、一般生理上、特に重要なる關係を有するものにホルモンがある、これは吾等の体内にある種々の腺から、內分泌に依つて、發生せられ、体内を常に運行して居るものである。このホルモンを分泌する主なるものは、腦下垂体、甲狀腺、胸腺、松果腺、睾丸等であつて、これ等の腺からのホルモンの分泌が旺盛で、それが、常に体内を運行することに依つて、常に、身体の健康が保證せらるゝのである。而して、淋病も、かく、ホルモンの体内の運行が旺盛であつて、身体の一般健康が、增進せらるゝことに依つて、自然に治療せらるゝ可能

性が多分にあるのである。

されば、このホルモンのことに關しては、淋病者は、相當の智識を有することが必要である。然かも、淋病は、時としては、ホルモンの分泌上、主要なる關係にある睾丸をさえ侵し、また、それを侵かさゞるまでも、それに接近して居る尿道を侵す病であるから、ホルモンの分泌上、その影響するところが少くない。

近來、人工的に、牛、豚、兎などの動物体から、特殊の方法で、ホルモンを抽出して、內服藥、若くは、注射藥として、種々なるものが用ゐられ、これ等も勿論、相當の効果があり、例えば、その注射藥を淋病の局部に注射するとか、若くは、內服することなどは、筆者の研究上、相當の効果のあるのは、確かであ

るが、やつぱり、その効果は一時的であつて、慢性的淋病を根治すると云ふことは、到底出來難い。されば、この點に於いて、ホルモン劑は、淋病藥としての價値は、やはり、疑はしいので左程重きを置く可きものではない。

然かし、これを一般健康上、若くは、淋病自然療法上から見るときは、体内に於けるホルモンの分秘を促進すると云ふことは、極めて必要で、要は、かゝるホルモンの分泌を如何にして、より旺盛に促進し得るかと云ふことである。

三十

大觀すれば、吾等の一般健康は、ホルモンの分泌を旺盛にする ことに依つて著しく、促進さるゝのである。種々の、所謂、ホルモン劑なるものは、只、單に、外部より、一時的に加ふものに過ぎないで、勿論、それも、相當の効果

はあるには、あるが、要するに、どこ迄も、一時的で、永久的でないし、且つそれは、自然的でないから、却つて、身体内のホルモンの分泌作用を減退せしむるの傾向があつて、良くない。

それでは、如何にして、ホルモンの体内に於ける分泌を促進せしむるかと云ふと、其方法の主要なるものは、やはり、食養療法であつて、例えば、種々の精力劑と云はるゝものは、大体に於いて、それに有効であるが、これ等の精力劑と稱せらるゝものゝ多くは、多くの塲合に、体内の生理狀態に故障を起し易いと云ふ矛盾があるので、よく、その用法と、分量とに注意しなければならぬ。それも、時と塲合に依つて、臨機應變的に行はねばならず、乃はち、淋病の自然療法上、ホルモンの分泌が必要だからとて、種々の精力劑ともなる可き肉類や

卵や、牛乳や其他の濃厚成分を含む食品とか、ニンニク劑などを多量に用ゆると、却つて、淋病の病勢を惡化し一方に効があれば、他方に害があると云ふ樣なことになるから、かゝる微妙な生理狀態に對しては体驗的にその用量若くは他の食品との調和的食養法に注意して、その宜しきに從はねばならぬのである筆者は、常に、一般食養法に關して、その根本義とも云ふ可きものを說明する場合には、元來、すべての食品は、死物であつて、それを、眞に活用して、生理上有効たらしむるには、恰ほ、良將が、兵を巧みに用ゐて、大勝を博するが如からしめねばならぬと云ふて居るが、淋病の場合には、それが慢性的であつて、長期間に亙つて、注意せねばならぬ丈けに、特に、それが必要なのであるそれには、こく、各食品の成分、性狀、生理作用を心得ることが必要なので、

食品學、榮養學の智識等が肝要になつて來るのである。

三十一

乃はち、將來は、すべての病氣は、自から、食養方法に依つて、治せらる可き時代が來るであらうが、少なくとも、淋病丈けは、現在とても、食養法に依らざれば、到底、完全に治せられ得ないのである。筆者が幸ひにして自分の數度の淋病を完全に自身にて治し得たと云ふのも、先きに述べし如く、古くから、專門的に、食養法の研究に從事し、前人未發の獨特の食養上の眞理を發見し、一生懸命になつて、自分の病氣を治することを研究したからである。乃はち、兼ねてからの自分の病氣は、自分で、治す可きものだとのモツトーを實行したことに依つて、その目的を達し得たのである。而して、それを他人に傳えて、

世の淋病を憂ふる人々の參考に供せんとするのである。ホルモンに關する話が大分長くなつたが、尙ほ、特に操り返して云いたいことは、肉類、ウナギ、トロ、芋、其他濃厚成分を有する西洋料理や、支那料理は、元來、淋病の病勢を惡化する作用が多分にあるので、尿道から、濃汁が多量に出たり、苦痛劇しき際には、これ等を用ゐることは、甚だ、禁物であつて、到底、その惡化を停止することは、出來ないが、淋病が、すでに慢性狀態に入り、苦痛が無くなり、濃汁の漏出も減少した場合には、適量に、肉類や其他の濃厚成分を有する食品を用ゐるも、差支えないのであるし、却つて、その方が、ホルモンの分泌を多くし、淋病の治療上有効であると云ふのである。要は、その程度問題である。

三十二

次に、体内のホルモンの分泌を促進する上に、重要なる事項に、精神作用がある。吾等の体内の諸機能は、何れも、この精神作用の影響を受けること重大で例えば、吾等が、何か急激に、驚愕する場合（地震其他の場合の如き）には、急に、心臓の鼓動は、劇しくなり、血管の收縮に依つて、顔色は、蒼白となり呼吸は促迫する等、外觀に現はれての變化を何人も容易に感知せらるゝのであるが、尙ほ、かくの如く容易に感知し得られざるホルモンの分泌なども、それに依つて、障害を受けて、その分泌量が減ずるを常とするのであるが、それは、急激の場合であるが、然らざる場合とても、精神狀態に依つて、常に、善惡共にその影響を受くること著しいのである。例えば精神的に種々の惱みがあり、特に、性的問題其他、何かしら、心に咎むることがあつて、幽鬱

に流れて居る樣な場合には、ホルモンの分泌は、著しく、減少せらるゝのである。

元來、淋病は、現代に於ける普通の道徳觀念から見て、不合理の行爲と考えられて居る男女の接觸に依つて起るものたる以上は、すでに淋病を得たるものはそこに、心中に、何等かの惱みがあつて、病勢が、惡化すれば、する程、何等か、心に咎めらるゝ如く感じ、何事か、物に憶するが如き心理狀態なるを常とし、恐らく、淋病を惱みながら、朗らかな精神の所有者はあらざる可く從つて淋病の苦痛を有する人々は、恰も、苦虫を嚙み潰したるが如き顏付を爲し、精神上の苦惱を示すのを常とするのであるが、かゝる人々に向つて、朗らかな精神狀態になれと云ふのは、甚だ、無理な注文か知らないが、然かも、それは、

よく、異性問題を合理的に了解し、且つ、淋病そのものゝ治療に確信を有することに依つて、多分に幽鬱なる精神狀態から脫して、朗らかなる心の持主となられ得るのである。

況んや、淋病は、長期に亘つて、慢性的であるに於いておやで、吾等は、長期に亘つて、幽鬱なる精神狀態にあればある程、淋病の治療上、大なる惡結果を齎らすのである。病は氣からとは、古くから、常に云はるゝところであるがこの言葉は、一面の眞理を現はし、特に、淋病は、そうであつて、筆者などの經驗上から見ても、精神上不快で、心痛があれば、ある程、淋病の惡化するのを見るのである。

特に、淋病を憂ふる當の局部にある神經は、腦神經作用の直接の影響を蒙むり

その證據には、例の特に交接せんとする際にも、相手方其他に、甚だ不快なることあれば、局部にその血行が停止されて充血せず、從つて、交接不能に陷入ることは、常に見るところであるに見ても、如何に、淋病に精神作用の重大なる關係のあることが明らかである。

三十三

乃はち、吾等が、長期に亘つて、朗らかであるのと、幽鬱であるのとでは、ホルモンの分泌、それと連關して、一般健康上に重大なる關係を及ぼし、精神に惱みがあれば、斷じて眞の健康であり得ないことは、確かである。されば昔から、吾等の精神狀態を改善するには、如何にす可きかゞ、哲學上、若くは、宗敎上の一大問題であつた。實を云ふと、すべての宗敎、若くは、哲學は、吾等の精神を朗らかに導びき、依つて、以つて、人生の幸福を增進することを目標としたものであると云ふて差支えがないのである。

近來、精神療法と云ふことが、大分、人々の注意を引いて來たと云ふことは、勿論、確實な論據のあることで、依つて、以つて、ホルモンの分泌を促がし、健康を增進すると云ふことが出來るのである。キリストは、病氣の治療に對して、種々の奇跡を現はし、病人に手を當てゝ『汝の信仰汝を癒せり』と叫んで立ちどころに病人を癒したと云ふ樣なことなども、病人がキリストを信ずることに依つて、絕大の精神上の慰安を受け、その結果、急激に、ホルモンの分泌が促がされ、引いて、種々の病が、忽ちに治したと云ふことが考えらるゝのである。

三十四

筆者は、キリスト敎の牧師などの說に依らず、筆者獨特の聖書の解釋に依る一個のキリスト敎信者であるが、眞に、キリストを信ずることに依つて、所謂、安心立命を得、精神上の平和を齎らし、依つて、以つて、ホルモンの分泌を促進し、健康を增進すると云ふことを得ると云ふ確信を有するものである

筆者は、キリスト敎を狹義に解釋せず、出來る丈け、廣義に、自然的に、且つ正當に解釋することに依つて、極めて、自然的に性問題が解決せられ、從つて性的煩悶を免ぬかれ得るものと考えて居る。キリストの言葉中に、娼婦は、その當時に於ける稅務官吏よりも、先きに天國に入ると云ふ樣な意味があるが、これは、キリストは、現今の多くの人々が考える樣に、娼婦を寧ろ、惡しきものとして居ないと云ふことを示したもので、娼婦にも、色々あつて毒婦もあれば、善婦もあり、何れかと云ふと、その職業上、惡婦が多い樣であるが、一種の職業としての娼婦の特殊の行爲そのものは、必ずしも、甚だしき罪惡と認めて居ないと云ふ樣なことが考えらるゝのである。

現に我邦にては、國家が、公娼を認めて居る位で、娼賣そのものには、必ずしも、不都合はなく、只、それを惡用しなければ良いと云ふことになる。

以上、かゝることを述べ來つた理由は、娼婦に接して、淋病でも貰つて來ると淋病者は、何か大罪を犯かしたかの如く、自から、精神的に惱んで、幽鬱になることを難ずる爲めで、淋病を得たからとて、大悟徹底して見れば、境遇上止むを得ず、本能を充たしたに外ならぬので、それが必ずしも放蕩の結果でな

いならば、自身に自から恥入つて、幽鬱に流るゝ必要がないと云ふ樣な軟派の爲めに吐いた一つの氣炎としてであつた。

かゝる筆者の文を例の質實剛健の氣を養ふことを本務として居る頑固な漢學的の人々が見たならば、眞赤になつて怒るであらうが、筆者は、どこ迄も、天與の自然的の本能に從ふことが眞の健康を得ると云ふ確信から述べた迄で、決して、人々を自墮落に導びかんとする爲めではない。

三十五

だから、要するに、淋病者は、成る可く、常に、筆者が上述し來つた食養法をよく、玩味体驗して、朗らかな心を持ち、靜かに、時期を待つて居れば、淋病の自然に治することと受け合ひである。ツラ〳〵人生を自然的に觀察するに、神

は、人を男女に作り、性の享樂を與え、その本能を發揮せしめて、自から、人生の意義を見さしむる可く勉むるかの如く見ゆる。されば性交は、單に、子孫の繁榮を重んずるが爲めに、ヤ〳〵ながら(?)義務的に若くは、勞役的に吾等に課せられたる事項でなくして、その中から人生の意義を見出さしめんが爲めに、無上の享樂と、幸福を、その中に秘めたものと解することが出來る。

我東洋、特に、日本は、過度に血統を重んじ、從つて、女を單に一つの血統を繼續せしめんが然めの具と考えたり、或は、優生學と云ふ妙な學の立塲から優良の子孫を得んとの目的の下に性愛を度外視して、無理に、犬や、馬を交尾さす如き意義を以つて、近親結婚を行つたりする政治家さえあつて、誠に性そのものを不自然に惡用する傾向が濃厚だ、そこえ行くと、支那人は、大分、大悟

徹底して居て『王侯將相何んぞ種あらんや』と云ふて、所謂、草卉の中から、王侯の出ずることを期待して居る。要するに、性愛や、性交は、特殊の目的に行ふ可きものでなくして、それ自身が、神聖なる可き天與の賜である。

然るに、人類の無智なるや、かゝる神聖なる可き事項を冒瀆して、種々の間違つた思想の下に利用せんとし、若くは遊興的に不眞面に取扱はんとして、種々なる不幸を自から招ひて居る。この點になると、現代の文化人と云はるゝものより南洋の土人やアフリカの原始人の方が餘程、性愛や、性交を自然的に、眞面目に取扱つて居る傾向がある。

三十六

以上述べ來つたところによると、筆者の主張するところは、性交そのものは、

極めて神聖視す可きもので、決して、冒瀆す可きものではないが、さてその性交を營む上に於いて、種々の場合があり得るので、從つて、その結果、淋病に罹る場合は、多大にあり得るのである。而して、筆者の研究するところに依れば、如何なる老婆も、老爺も、必ずや、そのシワクチヤな顏を變じて童顏と爲し、心身共に眞に若返らされ得る可能性が多分にあるのであるが、それには、食養其他色々なることが必要であるが、何れの場合たりとも、性交を差し置いては、目的が達せられぬのである。かゝる種々なる理由からして、到底、性交を人生から除外することが、出來ないのだから、從つて、淋病は、人生に附き物とさえ考えられるのであるから、たとえ淋病が一旦根治しても、二度、三度若くは、それ以上、該病に罹る場合が多大にあり得ると、考えなければならぬ

されば、吾等は、常に、長期間に亙つて、淋菌と對抗行動をしなければならぬのであるが、自然の作用は、やはり、強者に身方して、常に、數度以上、淋病を擊退した經驗のある身体は、終には、淋病に對して免疫性となつて、その害を免ぬかれ得るに到ることは、確かである、だから、吾等は、根氣良く、淋病に對抗する心掛けがなくてはならぬ。

三十七

淋病が、すでに慢性になつて、相當、長期に亙つた後でも、尿を、コップなどに取つて、よく明るい塲所で檢査して見ると尿が或は、混濁して居たり、尿中に、糸狀の樣なものがあつたり、綿の小片の樣なものがあつたりして、容易にそれが消え去らずにあるのであるが、かゝることがあつても、別段苦痛を感せ

ねば、そのまゝに放置して置いても、一向差支えがなく、また、時としては、尿道が、ムヅ痒い樣なことがあつても、身体の健康法を守り、特に、本書に述べた食養法を守つて、全身の健康を守つて居さえすれば、何等、心配することはなく、また、病勢の惡化することはない、時として、慢性淋病の病勢が惡化する如く見ゆるのは、それは、種々の不養生の結果、身体の健康が、惡化した結果であつて、もしも、また、健康が快復すれば、その程度に從つて、淋病も自から、善化するのである。

而して、淋病の際には、性交は、勿論良くないのであるが、然かも、それは、病勢が惡化して居る塲合のことであつて、淋病が長期に亙つて、慢性的のものである以上は、到底、性交を行はずに居ることは出來まじく、また、一方から

觀察すると、性交は、必ずしも、淋病に惡からずと云ふことも出來るのであると云ふのは、性交は、局部に、充血を來たし、その部の血行を促進する關係上、依つて以つて淋病の病勢を滅殺すると云ふ關係がある。あまり、取るに足らぬことであるが、古くから、淋病の際に獸姦を行ふと、良いと云ふ話があるが、それは淋病の際に、異性と性交を行ふ場合には、相手方に感染せしむる恐れがあるから、かゝることを故意に云ふたものかも知れないが。これは淋病の際に性交が、必ずしも、惡しくないと云ふことを云ひ現はしたもので、その度さえ過ごさないならば、必ずしも、淋病の際の性交は、病勢を惡化するものとは、限らないが、前述の如く、かゝる行爲は、病勢を惡化せしめざる迄も、相手方に、淋病を感染せしむると云ふ意義からして、良くないのは云ふまでもないことである。

三十八

公娼、私娼などは、殆んどすべてが、慢性淋病の所有者であるが、彼女等は、勿論、その惡化に依つて、種々の病氣を惹起する場合があり得るけれども、種々の一般攝生法を行ふに於いては、割合に健全で、必ずしも、淋病の惡化に依つて、健康を害するとも限らない、然かも、彼女等は、慢性淋病を持ちながら職業上、日々、數回の交接を行つて居るに見ても、性交が、必ずしも、淋病を惡化するものとは限らないのである。然かし、慢性淋病の所有者は、所謂、油斷大敵で、大酒を飮んだり、あまり、濃厚なる成分を有する食物を喰べ過ぎたり、過度に交接したりすると、病勢の惡化するのは免ぬかれない、勿論、公

私娼などは、交接後には、普通、局部を洗滌するが、男は、女と異なつて、尿道の洗滌は、そう簡單に出來ず、また、男は、尿道を洗滌することに依つて、淋菌を奥の方に追ひやり、却つて、膀胱炎、睪丸炎などの原因を爲すのだから、これは、前述の如く行はない方が良い。

三十九

從來、普通に、糖尿病、淋病などの尿に關係ある病の人々には、醫者などの勸めに依つて、常に尿を檢査することを心掛け、乃はち、尿をコップ其他のガラス器に取つて、その色彩、混濁、成分、特に淋病などの場合には、膿塊、糸狀物などの有無や、多少を檢査して、その狀勢に依つて、色々な方策を講ずる樣であるが、元來、尿の色彩や、成分其他の變化は、直接に、日常の食物の種類

や、分量に關係して、刻々に變化して往く可きものであるから、尿の狀態に依つて、食物の取捨撰擇に注意することは、勿論、好ましきことであるが、尿の狀態を考察して、あまり、心配したり、醫藥を用ゐたりすることは、斷じて良くない。すべて、病勢の惡化は、直ちに、腦神經に、その影響を及ぼし、頭痛、幽鬱、食慾不振等すべて、吾等に不快の感を與えて、吾等に警告を與るものであるから、多少共尿に變化があつても、あまり、身体に不快を感じたり、異常を呈せざる限りは、左程に心配するに及ばない。

要するに、現代の多くの人々は、病氣についてあまりに敏感であり過ぎる。醫者は、すべて、病は、早く注意して、治すならば、容易に治ると稱して早期診斷を人々に勸めるけれども、他の病氣のことは、別問題であるが、少くと

も、淋病は一旦、罹つたら一定の經過を經るまでは、到底治し難く、只、吾等は、その經過を順當ならしめて、食養方法に依りて、その惡化を防ぐと云ふことが最上の良法であると云ふことが出來る。

四十

要するに、吾等は、常に、何れの病菌にも侵かされざる生理狀態を有する身体を保持することを勉めなければならぬ。吾等の身体の四周には、常に、無數の黴菌が、ウヨ〳〵して居る。而して、もし、吾等の身体から、所謂、生命なるものが逃げ去り、一ケの物質たる死体となれば、その四周の腐敗黴菌、若くは体内にある種々の黴菌は、忽ち、時を得顔に、その作用を逞ふして、吾等の身体中の有機物質をば、分解し盡すのである。乃はち、吾等の身体が、現あるが

まゝに存在するのは、神秘的な、そして、未た、何人も、その正体を明らかにし得ざる生命が、体中に潜む　からである。かゝる生命は、果して、腦にあるか、心臟にあるか、はた胃腸中にあるか、一向吾等は知るところはないが、恐らく、この生命なるものは、体中に普偏的に存在して、身体の諸機能の活動を司どり、以つて、吾等の健全を保つのであらうが、かくの如くして、吾等の身体が健全でありさえすれば、如何なる病菌も、吾等の身体を侵かし得ざるのである。

四十一

多くの塲合に、淋病菌は、筋骨、逞ましく、その外觀は、鬼をも挫くが如く見ゆる青壯年を侵かし得る。それは、かゝる人々の身体は、成る程、普通の意

味に於いて、健全体であらうとも、少くとも、淋病菌に侵かされざる様な健全体ではないのである、それでは、淋病菌に侵かされざる、若くは一旦侵かされても、それを撃滅し得る健全体とは、果して、どうゆふのを指すかと云ふと、その説明は、中々困難であるが、先づ、筆者の唱導する完全なる食養法に依つて、而して、心身共に健康であることに依つて、自から到達され得るのである乃はち、筆者は、以上の諸項に亙つて、説明し來つたことをよく、玩味、研究体驗して、怠らざることに依つて、遂に、その目的が達せらるゝのである。

四十二

思ふに、食養法なるものは、元來、極めて、複雜のもので、必ずしも、一定の方式あるにあらず、乃はち、人々の

年齡、体質、境遇、精神狀態、健康の程度（例えば、胃腸の健全なる人と否らざる人と云ふ意味）、先天的、若くは、後天的嗜好、獨身であるか、否か、氣候天候、病あらば、その病勢の程度、狀態、

等に依つて、臨機應變的に、食養法を變更することが必要で、その臨機應變と云ふことが實は、その宜しきを得ると云ふことが極めて困難であつて、それは多く、体驗的を必要とする場合も少なからずあるから、およそ、淋病を惱む人

々は、筆者の此書に記せることの全般をよく、讀んで、而して、体驗的に、自から、研究的態度を持することが必要なのである。

四十三

近來、世界的に、種々の病氣に對して、漸く、醫藥萬能の域を脫して、注射、手術などの全盛時代、到來の感がある、而して、筆者の考ふるところでは、これも、到底、永久的のものでなくして、人類のあらん限り、永久的なるは、どうしても、食養療法であると思ふ、精神療法なども、相當古くから、大分行はれて居る樣であるがもと、食養療法と、精神療法とは、極めて、相接近したもので、將來、その一致を見て始めて種々の病氣に對する療法が、完成さるゝものと思ふ。大觀すれば、吾等は、特に、動脈や、靜脈を撰んで種々なるものを

注射しなくとも、口より始まつて食道を通り、胃腸を經て、肛門に終る一條の長き管は、これ、身体を上下に貫く、大なる堂々たる注射管であつて、吾等はこの自然の管に、身体に適する飮食物を適當に注射することに依つて、何等の苦痛なく諸病を治し、健康を保持、增進する樣に、身体が出來て居ることが分る。

然かも、かゝる自然の注射管に注射する食物が適當でない爲めに、種々の病氣に罹つたり、病勢が惡化したりするのであるが、多くの人々も、醫者も、どうゆう食物が、どう云ふ病氣に良いかを充分に知らぬので、從來、古くから、種々の醫藥や、其他の療法が用ゐられ來つたのであつた。

近來は、淋病の治療が、どうも、完全に行はれ難いと云ふので、多くの人々が

惱んで居るのに乘じてか、淋病熱氣療法なるものさえ出來て、特殊の機械の作用に依り、局部に攝氏四十度位の熱氣を與えて、熱に弱い淋病を撲滅すると云ふのであるが、筆者は、それを使用した經驗がないから、か丶る物理療法とも云ふ可きもの丶批判は避けるが、何れの場合たりとも、食養療法の安全で、確實なることをば度外視してはならぬ。

而して、食食療法と連關して、茲に、少しく、漢藥療法のことを述べて置かねばならぬ、曾て、我邦で、明治初年頃洋藥の輸入と共に、人々の捨て去つた漢藥が、近來、大分、人々の注意を引き用ゐらる丶樣になつたことは、大いに喜ぶ可きこと丶云はねばならぬ。

かくの如く、過去に於い、て一時、飛ぶ鳥をも落す勢であつた洋藥が、世人の

信用を薄くしたと云ふのは、洋藥が、數十年間に亘つて、我邦にて試みられたに拘はらず、割合に、その効果が顯はれず、却つて、年々、古代に增して、人々の平均壽命が短縮し、病人が激增すると云ふ樣な事實が、イタく、その信用を失ひ、人心をして、漢藥に復歸せしめたのと考えらる丶が、實は、筆者などは、古き時代から、漢藥禮讃者で、現在の漢藥流行時代を現出したのも、筆者も、確かに預かつて力あるとの自負を有する位である。

四十四

思ふに、漢藥の種類たるや、中々に多く、無慮數千種に上り、その範圍もまた極めて多くて、動物、植物、礦物界に亙つて居るのであるが、實は、吾等の日常の飲食物と漢藥との境界と云ふ可き點を殆んど見出すことが出來難く、漢藥

は、食物の延長であると云はる可きと同時に、また、食物は、漢藥の延長と云ふことも出來る位に漢藥と、飲食物とは、密接な關係があるのである。だから、達觀すれば、漢藥療法は、食養療法の一種だなどと云ふことも出來るのである。乃はち、吾等の日常用ゆる、茶珈琲を始め、種々の野菜類、魚貝類中には、その籍を漢藥に置くもの多く、前述した、ハブ茶、味柑の皮、ナツメ其他の果物など、支那では、昔から、普通に用ゐらるゝ漢藥であり、餅に入れるヨモギ、蓮根、大根等に到るまで、漢藥として使用せらるゝ場合の多いことは、人々の知るところである。

されば、筆者は、漢藥療法は、食養療法中の一種と見做して、色々と研究して來た、而して、淋病などは、かゝる意味に於いて、漢藥療法の効果の少なから

ずあることも確かである。例えば、すでに、前述した何首烏、ドグダミ、ゲンノシヤウコ、ハブ茶などを淋病の際に、常に怠らず用ゆれば、何人にも効果あるに違ひないし、筆者は研究体驗上から、その確實なることを斷言するが、その用ゆることが一時的であつてはならぬから、相當、永き期間繼續して用ゐなければならない。

四十五

かゝる種々なる漢藥の用法であるが、それは、何れも、茶を煎ずる如く煎じて用ゆるのであるが、概して、あまり濃厚なる煎汁は、種々の意味に於いて良くないが、それも、病勢の如何によりけりで、病勢劇しき際には、相當濃くして用ゆるを良しとし、最早や、大分病勢減退して、慢性になつた場合には、成

る可く薄くして用ゆるを良しとする。

最早や、殆んど、淋病食養療法の要點を述べ盡した積りであるが、すべて、慢性的病は、一時的に早急に治せんとしても、多くの人々には、困難であるしまた、別段に大なる苦惱を感せないならば、そう、早急に治す必要もないしするから、そして、第二、第三回と云ふ樣に淋病に罹る機會を作る場合もあり得るのだから、成る可く、氣を落ち付けて、治療するのが必要である。

四十六

從來、人類は、その創造以來、多年に亙つて、依らしむ可く、知らしむ可からず主義で、教育されて來た、特に、我が東洋に於いて然かりであつた、かくして、吾等は、何事も、その眞相を知らずに來て、多くの事項が闇から闇に葬り

去られて過ごされてあつた。特に性に關する種々なる問題中にも、淋病の如き性病に關しては、人々は、口に出すのを恥ぢ、また、一般社會からも、一度び淋病に罹つたものは、不良性を帶びたものとせられ、イヤがられ、遠ざけられるから、多くの人々は、淋病に關する眞の智識を得る機會が極めて少なかつた特に女に於いて然かりで、彼の社會に相當の地位を有する人々が、淋病の故を以つて、結婚解消と云ふ、寧ろ滑稽なる場面を展開するに到つた樣な事實があつたが、これ等は、全く、間違つた考えの生産物で、勿論性病を公々然と平氣で明るみえ出す樣なことは、愚かな行爲に相違ないが、さりとて、現代の眞の科學を無視して、淋病を あまり 恐れ過ぎたり、恥入り過ぎたりして、却つて身の不幸を招くことも、また、愚かなことゝ云はねばならぬ。

要は、何事も研究す可きであるから、その心にて、何人も、男女共この淋病に關しては、よく研究して、その合理的智識を得て置く必要がある。

四十七

神が何故にかゝる病氣を吾等に與えたかと云ふ一面の觀察については、すでに前記したところであつたが、今や、事實上、淋病は、我邦の男女を人知れず惱まして居ること多く、從つて一身上の不幸は、勿論のこと、これを大にしては一般社會の進運を妨害すること多く、すでに、古くから、淋病は、亡國病とさえ極論した人もある位であつたが、筆者が本書を著はしたのも、實はかゝる個人若くは、社會の不幸を救はんが爲めで、決して、世に、大々的に廣告して、名利を貪ばらんが爲めではない。

然かし、現今の我社會は、不合理のことが、大分世に行はれて、筆者の眼から見れば、誠に、イカガはしき種々なる滋養劑や藥劑や、その他のものが、資金の豐富なるを頼みとして、數千金、數萬金を投じて、新聞紙上に大々的の廣告を爲し、世人の目を眩惑する傾向があり、從つて、世人がそれに迷はされて居ると云ふことは、事實が證明して、病人が、却つて激增すると云ふ樣なことを常に目の當り見るのである。乃はち、かゝる滋養劑や、藥劑を賣る人々の目的は、眞に、その効果を研究するのではなくして、その研究の主眼とするところは、如何にして、巧みに、新聞紙上や、其他に、廣告せんかにあるが如くに見えるのである。

されば、その廣告の方法たるや、實に、益々、巧妙となつて來て、筆者の如き

専問學者さえも、ツイ、欺れる様なことが多くあり得る。一例を擧ぐればすでに、世を去つて居る故人の名を利用して、大々的に廣告して、健康長壽劑として、或る滋養劑と稱するものを賣つて居るが如き、もしも、そのものにして、眞に健康長壽の効能があるならば、なぜに、その發明者は、少くとも、七十歳とか、八十歳とか、若くは、それ以上健康でないであらうか。僅か、五十歳や、六十歳の年齢で死んだ故人が發明したものが、左程に、大々的に廣告する程に、効能があるとは、何人にも、考えられぬではなからうか。

思えば、かゝる事實は、寧ろ滑稽であつて、我邦には、すでに故人になつて、アノ世に往いて居る人々迄が飛び出して、健康長壽の榮養劑を賣つて居ると云

ふ有樣である。世人の迷ふのも無理もない話である。

もしも、種々なる器械の發明とか、何とか、事、生命に關係せざるものゝ發明に、故人の名を引合に出すのは、何年後でも、差支えなからうが、健康長壽に關する藥の發明に一向、長生もしない人の名を何々博とか何とかして利用するとは、決して、正當な事ではない、以上は、單に一例を擧げたに過ぎないが、我邦には、胃腸病で死んだ人が、胃腸の藥を賣つたり、肺病で死んだ醫學博士が、肺病療法の書籍を著はしたりして居る。これ等は、何れも矛盾した話で、かゝる矛盾が社會から取り除かれざる限りは、眞に、我邦人が健康にならないと云ふ信念の下に、この機會を利用して一言以上のことを述べて、此書の結論とする。

此書は確かに昭和八年、六十四歳である筆者の体験を基礎として書いたのであることを再度茲に述べて置く。

淋病食養根治秘法（終）

昭和八年七月十日印刷
昭和八年七月十五日發行

（定價金八拾錢）
送料六錢

不許複製

著者　井上正賀

發行兼印刷者　東京市小石川區丸山町十一番地　小菅太郎吉

印刷所　東京市小石川區丸山町十二番地　長文舍印刷所

發賣所　東京市小石川區丸山町十一
電話大塚(86)〇三八九番
振替東京六九三一四番
大日書房

近版　美容若返法大家
井上正賀氏著

心靈感應健康法

定價　八十錢

本書は著者が健全哲學とも云ふ可きものゝ前人未發の奧義を体驗的に研究体驗し最も平易に記述したものである眞の健康も類する人には是非一讀す可きものである。

東京市小石川區丸山町十一
大日書房
振替東京六九三一四番

健康、美容、若返法大家　井上正賀氏著

諸病食餌療法

胃腸の食餌療法

何れも三百頁　定價壹圓　送料四錢

著者は、明治廿八年東京帝國農科大學農藝化學科を食養學專攻にて卒業し爾來食養健康治病若返法を研究体驗せらるゝこと約四十年現に六十四歳にて三十代時代の体質を有して居られその結果の結晶したのが本書です。何人にも一讀を推めます。

東京市小石川區丸山町十一

大日書房

振替東京六九三一四番

新刊

益軒五訓

總クロース
上製函入

楠正信編　四六版三二〇頁　定價壹圓五十錢（送料十二錢）

之ぞ思想國難に處する教化讀本

白日の下、而も警戒嚴重な首相官邸に於て、時の宰相犬養毅氏は[redacted]刃に斃れた時も同時所謂血盟團の一味によりて危くも帝都は將に暗黑化されんとした思想の險惡世道人心の弛廢それ實に斯くの如く社會は今や文字通りの危機に直面してゐる。

本書「益軒五訓」は先哲貝原益軒先生の處世人道を說示された教訓を、編者が更に平易に校訂した現代教化讀本であつて實に現下の社會に處すべき道を瞭にすると共によく誤れる思想界を啓發するに足るもので、敢て爲政家、教育家、宗教家は勿論廣く愛國の士に推奬する次第である。

東京市小石川區丸山町十一

大日書房

振替東京六九三一九番

美容若返法大家
井上正賀氏創製

胚芽の素

定價金壹圓

本品は、井上正賀氏が食養上の全智識を應用して世の需要に應じ創製したもので滋强劑として天下無敵のものである。

東京市小石川區丸山町十一
代理部 大日書房
振替東京六九三一四番

終